

塚本善隆先生の思い出

高 橋 弘 次

「今は何を勉強しているのかね」と塚本先生の声が背中に伝わってきて、その答えに汲汲としている自分の姿を夢想するこのごろである。昭和五五年一月三〇日、八二歳で塚本先生

は亡くなられたのであるが、わたくしには亡くなられたという思いはない。わたくしは高校を卒業して佛教大学(四年間)と大谷大学(三年間)とに学んだが、その最後の一年間を除いた六年間、塚本先生の住職する清涼寺(嵯峨釈迦堂)に随身としてお世話になった。

わたくしが清涼寺の随身となった因縁は、わたくしの祖母の妹、藤堂くら(藤堂祐範の妻)の世話になるものであるが、その理由の一つはわたしの遊び好きを拘束するためであった。夏は五時起き冬は六時起き、本堂での勤行、それに境内一万坪、本堂・庫裡で六百枚の畳が敷かれていたが、そのの掃除、そして朝食をとり大学に通う。大学から帰って、少な

いが檀家詣り、参拝客の案内、夕の勤行など、きびしい随身生活であった。

したがってときに解放を求めてか、あるいは性来の遊び好きのせい、青色青光・赤色赤光を追って京の街にでて、飲酒行にはげむ。時間を忘れていて気づいたときは深夜、こわごわ帰寺するが、先生の書齋にはあかあかと電灯がともし勉強されている。酒の酔は一気にさり、自分の愚かさに気づかされること、これが二・三回にとどまるものではなかった。

そのころ先生は六〇歳前後の京大人文科学研究所長時代であったが、凄じい勉強のしぶりであった。

先生は五歳のときお父さんを亡くしておられる。実はわたくしも五歳で父を亡くしていて、そのためか厳しさのなかにも温いことばをかけて下さっていた。しかし同じ幼いときに父親を亡くした境遇といっても心構えは違っていた。先生は

佛教専門学校（佛教大）から宗教大学（大正大）に進み、さらに京都大学文学部選科で学ばれたのであるが、宗教大学の「この二年間で、塚本さんは学究と仏教者の併立を見定めたといえる。つまり、学究の誓願をわが生の果てるまで精進しつづけることが、充実した人生を生きぬく仏教者の実践である、と観じて迷いなき一筋の道を踏み出した」（昭和五二年三月五日『朝日新聞』夕刊の記事）と、人をしていwashめるほどであり、事実、先生の生涯はそうであった。

先生の学問的業績は、学究と仏教者の併立のなかに積み重ねていかれたものであるが、その量と質とをいまさらあげて語る必要はない。先生の業績がいま同学・後学の研究への輝かしい金字塔となっていることはいままでもない。しかしこうした先生の業績が、たんに先生の性来の「学問好き」にだけゆだねられるものではない。先生は徹夜に近い原稿書きが数日続くと、眼が充血する体質であられた。血のしたたり落ちそうにみえる充血した眼でも、なお原稿書きの手をゆるめることなく、便所にゆくにも書籍を手ばなすことはなかった。法然上人に「^{かたず}廁の念仏」というのがあるが、塚本先生には「^{かたず}廁の勉強」というのがあった。

先生には学問的貢献がより評価されることからか、仏教者、住職としての評価には人の知らなさが加わっていた。年中行事の法要や月例における法要でのお説教は、弁舌さわやか、聞くものをして喜ばせ泣かせること自由自在、参詣者のこ

ろをなごませ、仏教者としての面目躍如たるものがあった。葬式の導師をされてもその引導（^{あき}下炬）は、型通りのものでなく、亡き人の思い出を語り、聞く関係者をして納得さすことと神わざに近かったといえよう。また清涼寺を世にいう観光寺院にしないという信念は固く、どこまでも寺院は信仰道場としてあるべきだと、住職としての識見をみせておられた。

ときに先生は、理想主義者と思わせる発言をされ、若いわたくしたちを奮い立たせようとするアジリをよくされた。それは学者として、あるいは仏教者として、ときに政治への関心事から、さまざまであったが、よく衝くところをつきはげしいものがあった。こうした強い先生にも弱いところもあった。漬け物、こうこう、といった香物は一切きらいであった。リンゴがお好きで、日ごろリンゴが漬け物がわりであった。また酒が飲めなかった。飲まなかったのではない。これがわたくしにとって先生に劣らぬ唯一のまさるところであった。

先生の思い出は書きつくせぬが、外柔内剛の生活のなかに、なお厳しい内なる生活を持続され、みずから「わたくしの学究生活は楽しく老を忘れてつづいた」（『塚本善隆著作集』第一巻の序）といわしめるほどに、先生のご一生は初心貫徹、それも清らかで純粹であり、尊いものであった。

（たかはし こうじ 文学部教授）